
ゾンビ 現代版

black out

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゾンビ 現代版

【Nコード】

N9944F

【作者名】

black out

【あらすじ】

フィラデルフィアの街にゾンビが大量発生！ステイブとフラン、SWATのピーターとロジャーは街から脱出しようとする。ジョージ・A・ロメロの「ゾンビ」を現代的にアレンジしたアクション・ホラー。

序章 テレビ局（前書き）

オリジナル「ゾンビ」とはかなり異なりますが、あくまで、「ゾンビ」の設定を拝借しただけの、作品です。

序章 テレビ局

フィラデルフィア 午後2時25分 テレビ局

「街は死人で溢れかえっています。」

「何が原因なんですか？」

「映せ！スクープだ。」

テレビ局は混乱していた。フランシーン・パーカーはディレクターとして、ニュース番組を仕切っていた。

今街は、突如死人が生き返るという謎の事件が起こっている。しかも、人々を襲い、それに噛まれた者もゾンビと化していくのであった。州は州兵を送り込むことに決定。生存者を確保し、ゾンビ掃討作戦を開始。だが、この騒ぎで市民の中には暴徒化した者もいた。そのため、あちこちで戦闘が起きており、街は無秩序の状態となっていた。

部下に指示をするフラン。

「ねえ、エマ。現場についた？」

無線の向こうから、銃弾の音とエマの声が聞こえてきた。

「はい。今州兵と市民との間で、激しい戦闘になっています。こちららは、州兵が3人死者が出ています。市民は・・・、」

そこで途切れて、激しい爆発の音が、無線から聞こえてきた。

「エマ？エマ？どうしたの？エマ！」

ただ、返事が無い。聞こえてくるのは、弾の飛び交う音だけだ。

「ウワッ！」という声も聞こえてきた。

「フラン！」

その時、ステイブンが来た。「いっしょにヘリで逃げよう。」

「ダメよ。」

「いいから。」

ステイブンに説得され、フランは部下に逃げなさいと言うと、ステイブンとヘリがある屋上に向かった。

ドアを開けると・・・ゾンビがいた！

第一章 ピーターとロジャー（前書き）

「ゾンビ」に出て来ない人物も出て来ます。

第一章 ピーターとロジャー

フィラデルフィア 午後2時20分
警察署前通り

フィラデルフィア警察と書かれたSWATバンが、警察署から出てきた。バンは、銃撃戦の音がなり響く、市街地に向かって走り出した。近付くにつれ、銃を撃つ音や爆発音が大きくなってきた。バンを運転している隊員が言った。

「一体何なんでしょうね」

隊長「分からん。が、死者が生き返って人を襲っているらしい。ああ、昔似たような映画があったな。ゾンビ・・・だったかな？一応知ってるだろ」

隊員「ええ勿論。バイオハザードとかも有りました。」

隊長「まさか、現実になるとは思ひもなかった。」

隊員「まさに、終末世界って感じですね。」

「そうだな・・・」

隊長が呟いた。

窓の外は煙たく見え、大通りに出た途端、死体が目に入った。道路のあちらこちらに死体、死体、死体。道路には人気もなく、車が捨てられていた。隊員は、死体をうまく避けながら、バンを運転した。隊員「ここは人気がないですね」

隊長「今向こう側で、州兵と暴徒化した市民とで激しい戦いになっている。何でもゾンビのせいで無法地帯に等しいからな。」

バンが角を曲がると、生々しい光景が広がっていた。市民の死体がたくさん散らばっており、皆それぞれ武器を持っていた。

隊員「暴徒化した市民か・・・。」

車が10台ほど燃えており、あちらこちらに州兵の死体もころがっていた。戦闘があったらしく、建物や塀に銃弾のあとがたくさんあ

った。建物が炎上し、道路は4分の1が血で染まっていた。隊長らは、言葉を失った。

バンの奥

ピーターはゴーグルを拭きながら、ロジャーに話しかけた。

「ゾンビのせいで街はメチャクチャ、調子に乗ったテロリストがビルまで占拠か」

ロジャー「んまあ、州兵といっしょにイカれた市民といつまでも戦うよりは、チャチャッと突入して、テロリストどもを排除する方がいいだろ？」

ピーターは、SWATに憧れて、2年前に入った。ロジャーも同時期に入ったので、二人は仲良しである。丁度入隊したときに、立て籠りがあった。SWATが突入して銃撃戦に発展したが、その時にピーターは、犯人らに囲まれて身動きがとれなかったが、それをロジャーが助けたのだ。ロジャーが即座に犯人を一人射殺し、ピーターの所に飛び込み、そして二人で、残りの犯人らを射殺して助かったのである。それ以来、ロジャーとピーターはタッグを良く組むようになった。

ピーターはさらにグチをこぼした。

「まったくこんな事やだぜ」ロジャー「オレもさ」

他の隊員も口出ししてきた。

「オレはファックまだ5回目だぞ。今やりたくてビンビンしてるぜ。」

ピーターとロジャーは、苦笑した。

ピーター「お前のチンコはデカ過ぎるんだよ。入れたら女が泣くぜ。オナニーでもしてるよ」

ロジャー「よく言うぜ。ウチはエリザと離婚だぜ。野郎、弁護士のヤツとSEXしてたぜ。弁護士のヤロー、オレが脅したらチビリやがったぜ」

バンが爆笑に包まれた。

ピーターはゴーグルを拭き終わると、きちんと装着した。

バンが走っていった道路には、死体がいくつも転がっていた。バンが再び角を曲がった後、州兵のジープが市民と撃ち合いをしながら、通りに入った。

第二章 マイク・スタンフィールド（前書き）

この章から、オリジナルキャラが登場します。

第二章　マイク・スタンフィールド

フライデルファイア大通り　午後2時27分

マイク・スタンフィールドは、ペンシルバニア州兵である。彼等の元に連絡が入ったのは、午後1時であった。マイクらの部隊は、ゾンビ掃討作戦に参加し、午後1時25分から任務に就いた。

最初はゾンビの掃討だったが、暴徒化した市民が武器を手に襲撃。事態を重く見た米軍は、戦闘を許可。治安が良かった街は、一気に戦場へと変わってしまった。いまやあちらこちらで銃撃戦が起き、死者は州兵でも120名ほど出ていた。さらに、テロリストのビル占拠も起こり、最悪の状態に。

マイクらの部隊は、大通りを警戒しながら歩いていたが、銃の音が遠くからなり響いていた。

マイクは銃を構え、いつでも戦闘ができる体勢にしていた。先頭の車も低スピードで走り、隊員が機関銃を左右に向けながら、進んでいた。道路には死体や燃えてる車、武器が散乱しており、州兵の死体も少し落ちていた。

先頭の車が通りの角を曲がった時、いきなり、バズーカを抱えた男が飛び出してきた。

「避けるー!!」

隊員が叫ぶ。突如、マイクの斜め前50メートルの所で、道路が吹っ飛んだ。マイクは身を伏せる。バリバリ!と音がすると、男は肉片を飛び散らせて倒れた。すると、すぐ横の喫茶店から、男達が銃を撃ってきた。

「奇襲だ!」

隊長が叫ぶ。

隊員達は、すぐさま反撃に出た。車の陰に隠れ、喫茶店に向かって

撃ち始める。ガラスが砕け、入り口のものが飛ぶ。銃弾が車に当たり、カンカン音をたてる。ウージーを乱射した男が飛び出したが、すぐさま集中攻撃を受け、脳ミソを飛び散らせながら倒れた。

機関銃が火を吹く。喫茶店のインテリな入り口は、一瞬にして壁剥き出しになり、テーブルの陰の敵が血だまりに消える。2階から、別の敵が撃ってくる。隊員が一人、防弾チョッキから血を吹き出させて、倒れる。機関銃が壁を吹き飛ばす。

マイクは仲間とともに、建物に突入した。血だまりを乗り越え、奥にいた敵を撃ち殺し、仲間と喫茶店を隅々まで安全確認する。外ではまだ、激しい銃撃戦をしていた。

マイクは階段を慎重に登る。2階に到着すると、一番手前の部屋のドアをけつとばした。中の敵が反応する。マイクは四の五の言わずに、一人に銃弾を撃ち込むと、柱の陰に隠れ、銃を撃ち始めた。他の隊員も、次々に部屋に入ってきた。敵がテーブルやソファを盾がわりにして、反撃する。しかし、隊員達の銃弾はテーブルをつきぬけ、敵を次々と絶命させていった。ソファの陰から身を出した敵が、首筋から大量の血を吹き出させた。壁にどんどん血が付着していくと、トイレから敵が撃ってきた。目と鼻の先にいる隊員がすぐさま反撃するが、敵のウージーが、隊員の体を通過する。隊員は、銃を撃ちながら倒れた。マイクはすぐさま、弾倉を変え、敵に撃ち込んだ。敵はそのままトイレに倒れた。

「敵が多過ぎる！ 応援を・・・」

言おうとしていた隊員の後ろから、敵がショットガンで、隊員の頭を吹っ飛ばした。ヘルメットや肉片が飛び散った。その前にいた隊員が、ショットガンに手間取っていた敵に銃弾の制裁を加えた。血が舞った。

部屋の辺り一面に血が舞い始める。階段から、別の隊員らが登ってきて、すぐさま応戦した。辺りに火薬と血の臭いがただよった。

さらに、もう2、3人の隊員が前に出て、敵を容赦なく射殺した。もう一人敵が残っていたが、銃を捨てて手を上げた。マイクらは銃

を構え、ソファの陰から出てくる敵を警戒した。と、隊員の一人が銃を撃ち始めた。

「やめろ！」

マイクの叫びもむなしく、降参した敵は、血だまりに倒れた。マイクは隊員に銃を向けた。

「なぜ殺したんだ、ジョニー」

ジョニーと呼ばれた隊員は、にらむような目付きでマイクの方を向き、銃を構えた。他の隊員らもジョニーに銃を向ける。

マイク「なぜやったんだ！彼は武器も捨てた。何の為に！」

ジョニー「仕方ない。敵を信用できるか？もし、銃を隠し持っていたら？」

マイク「お前は無抵抗の市民を殺した。ほら見ろ、銃は持っていない」
マイクは銃を下ろして、死体を確認した。ジョニーの顔が、怒りに支配されていく。マイク「ジョニー、銃を下ろせ」

ジョニー「うるせえ、黙れ！何が銃を下ろせだ！こんな状態で民間人がどうのこうの関係ねえ！」

マイクは銃を構え直した。

「ジョニーたのむから・・・」

ジョニー「うぜえ！黙れ！近付くな！」

マイクは近付いた。

ジョニー「来るな！来るな！死にてえのか」

ジョニーは引き金に指をかける。と、後ろの隊員がジョニーを押さえた。

「何しやがる！離せ！」

隊員「君は少し落ち着いた方がいい」

しばらくもみ合いになったが、ジョニーは抵抗をやめ、謝った。

「すまん、オレこんな状況で・・・、アタマいっぱい。アタマおかしくなったんだな。ちよっと・・・、その・・・」

と、隊員の一人が叫んだ。「うあーっ！」

みんなが一斉にその隊員を見た。と、次の瞬間、アダムは銃を仲間

に向けて構えた。そして、引き金を引いた。

隊員が、血を飛び散らせながら、後ろのガラスをつき破った。アダムは、ジョニーを捉えた。ジョニーの顔が恐怖に包まれる。銃弾はジョニーの体をつきぬけ、ジョニーはしゃべることなく、倒れた。さらにアダムは3人目の隊員を標的にした。隊員も反撃したが、アダムには当たらず、逆に銃弾を大量に浴びて、くずれ落ち始めた。マイクは、銃を乱射しているアダムに向けて、銃を撃った。首に弾が当たり、アダムが大量の血を吹き出す。アダムはそのまま死んだ。マイクは銃を構えたまま、アダムの死体に近付いた。他の5、6名の隊員が、銃を下ろす。

隊員1「一体何だ？」

隊員2「イカれたんじゃないか」

マイク「いや、ゾンビだ。人を襲う欲求が出たんだ」

隊員2「じゃあ、まさか・・・」マイクは無言でうなずいた。

いつの間にか、銃撃戦の音はやんでいた。

第三章 ゾンビ遭遇

ファイラデルフィア ＊＊＊＊＊ビル

午後2時31分

準備は整いつつあった。15名程度のSWAT隊員が、ビルの周りをせわしなく走り回っていた。みんな、ゴーグルとマスクで顔が隠れている。

隊長「まず、ブルーチームが階段から、テロリストが占拠している20階まで登る。次にレッドチームが、屋上で待機。『開始』の合図で、ブルーチームはそのまま突入し、奥の敵を排除。レッドチームは、ロープをつたって、窓から突入。レッドチーム突入の前に、狙撃班が窓らへんの敵を、全員射殺する。そしてレッドチームは、人質がいる21階に行き、敵は全員排除し、人質の安全を確認せよ。犠牲は少しで済む。質問は？」

みんながOKサインを出した。

「よし、作戦開始は14時40分だ。全員、位置につけ」

ピーターはヘリに乗り込み、ロジャーは、ブルーチームと行動する。

ピーターはグーサインをした。ロジャーも返す。

隊長「狙撃班が位置に着いた。突入班は位置に着け！」

ヘリが道路を飛び立つ。と、同時にブルーチームが1階のドアを壊して、中へ入った。

ヘリはあっという間に屋上に到着し、ピーターは一番に降りると、銃を構えて、屋上の隅々まで安全確認をした。

ピーター「こちら、異常はありません」

隊長「よし、位置に着け」

ピーター（他4名）は、パイプにロープを結びつけた。

ピーター「こちら、位置に着きました」

隊長「よし、合図を待て」

ピーターらは、屋上で待機した。

一方、ブルーチームも階段を急いで登っていた。そして、20階に着くと、隊員が準備OKの合図を出した。ブルーチームは10名である。みんなの額に、汗が流れる。今度の突入は、命がかかっている。敵は様々な装備で武装しており、油断は命とりだ。

隊長から命令がでた。

「レッドチーム、GO！」

ピーターらは、ロープをつたって、ビルの側面を降り始めた。

「ブルーチーム、GO GO！」の合図で、ブルーチームはドアを蹴破って、突入した。

狙撃班が、狙いを定めた。レッドチームの隊員らが、30階まで降りて来た。狙撃班の隊員らは、一斉に発砲した。ガラスが碎けて、テロリストの頭が吹っ飛んだ。窓際の他のテロリストも同様にして、脳みそを飛び散らせた。

レッドチームが、25階を過ぎていった。

ブルーチームの隊員らは、銃を構えながら、奥へと進んでいった。ドアがあった。隊員がドアを開けた。すると、ドアがいきなり爆発し、ドアを開けた隊員は、後ろに吹き飛ばされた。ドアの向こうに、銃を構えたテロリスト達がいた。テロリスト達は、容赦なく撃ってきた。隊員らも反撃する。テロリスト達は普通に立って撃っていたので、すぐさま集中砲火を浴び、床に突っ伏した。

隊員「こちらブルーチーム。テロリスト2名射殺。隊員が一人死亡」
ロジャーは、別の隊員が報告をしている間に、ドアを越え、敵がい
ないか確認した。

「クリアー」ロジャーは言った。

SWAT隊員らが、どんどんドアを越えていく。
オフィスに出た。隊員らはオフィスを進む。と、テロリスト達が、

オフィスの向こう側から、銃を撃ってきた。オフィスのガラスが割れ、パソコンの画面にヒビが入った。隊員らはしゃがんで、反撃を始めた。コピー用紙が宙を舞い、パソコンから火花が飛ぶ。ロジャーは弾倉を変え、身を出したテロリストに撃った。テロリストが規則的な血しぶきをあげて、デスクに倒れ込んだ。他のテロリスト達は、ウージーやAKで撃ってきている。テロリストの一人が、何か握っている。

「手榴弾だ！伏せろー！」

ロジャーは叫んだ。と同時に凄いい閃光が光り、音が響き、机の欠片が飛んできた。前にいた隊員が、床に横たわり、体に無数の破片が刺さっていた。

と、テロリスト達が銃撃を強めた。隊員の一人が被弾し、首から鮮血をほとぼしらせて、ガラスを突き破って倒れた。

レッドチームは、21階の窓ガラスを銃で撃って割り、中へと突入した。床には脳みそを飛び散らせた死体が、いくつも転がっていた。ピーターは銃を左右に向けながら、奥へと進んだ。他の隊員がそれが続く。下の階から、銃を撃つ音が聞こえてきた。隊員がドアを蹴破り、安全確認をした。人質のいる部屋は、かなり奥にある。ピーターらは、ゆっくり注意しながら、奥へと進んだ。

ロジャーの横のパソコンが碎け散り、破片が顔にかかった。ロジャーはゴーグルをさっと拭くと、テロリストに向かって撃った。テロリストの脳天が、飛び散った。

隊員がテロリストを撃ち殺して、前に行った。すると、デスクの陰から、別のテロリストがウージーを撃ちながら、飛び出してきた。隊員は反撃する間もなく、床に突っ伏した。すかさず、他の隊員がテロリストを攻撃した。今度はテロリストが床に突っ伏した。

ロジャーは向こうから、何かを持ったテロリストが来るのが分かった。「バズーカ!？」

その瞬間、オフィスが揺れ、とてつもない爆音が響いた。ロジャーが顔をあげると、隊員の首や手が落ちていて、血が飛び散っていた。「繰り返す、隊員2名が死亡。敵はバズーカを所持しています。繰り返す、てき・・・うっ！」隊員が倒れる。

このままではマズい。全滅する。ロジャーがそう思った時、テロリストの方から、悲鳴が上がった。

ロジャーが見ると、それは信じられないことであった。死んだはずのテロリストが立っており、生きているテロリストに噛みついていった。

「うぎゃああああ！」

テロリストの首から、鮮血がほとばしった。他のテロリストも、元仲間に襲われていた。「うぎゃああ！」「やめろお！」「ぐあっ！」悲鳴と肉のぐちゃ！という音が、オフィスに響いた。

隊員らは、呆然として、見ているだけだった。

レッドチームも戦闘に巻き込まれていた。階段のテロリストと銃撃戦になり、テロリストが3名隊員が1名すでに死んでいた。

テロリスト達は、銃を乱射していた。ピーターはすかさず、テロリストを射殺した。他の隊員も応戦する。ついに、テロリストの最後が倒れ、動かなくなった。隊員らが、角を曲がる。と、機関銃を構えたテロリストがいた。

ピーター「伏せろ！」

だが遅く、機関銃が火を吹いた。2名の隊員が血と肉片を飛ばしながら、倒れた。他の隊員らは隠れる。ピーターは狙ったが、機関銃が壁を吹き飛ばし、撃てない。目の前で倒れているテロリストに目がいった。手榴弾を持っている。ピーターは手榴弾を取り、投げた。激しい爆発音がし、テロリストが吹っ飛んだ。隊員らが確認し、奥のドアを開けた。人質がいるはず・・・。だがそこには、人が人を襲っている光景しかなかった。隊員らは啞然とする。と、一人が隊員に飛びかかった。そして、隊員の首を噛んだ。血がブシューウ

ーと噴き出す。他の隊員が引き離れたが、隊員はぼったりとなった。そして、他の人が飛びかかってきた。隊員らは銃を撃ったが、数が多過ぎた。次々に餌食になっていく。ピーターは部屋を飛び出し、無線連絡を取った。

「メーデー！こちらレッドチーム。人質に襲われている。繰り返す、人質に襲われている。至急応援を！」

だが、無線の向こうの悲鳴にかき消された。銃声が聞こえる。

ピーター「どうした？聞こえるか？おい！」

ピーターは、舌打ちをすると、銃を構えながら、下に降りた。ロジャーがいるはずだ。

第三章 ゾンビ遭遇（後書き）

S W A T突入作戦の記述におかしな店があるかもしれませんが、気にしないで下さい。

第四章 テレビ局（前書き）

ラブストーリーが絡んできます

第四章 テレビ局

テレビ局

午後2時20分

スティーウ、ンとフランは、倉庫に隠れていた。さっきのゾンビからは逃げたが、武器を持っていない二人にとって、とてもかなわない存在であった。

フラン「ねえ、これからどうする？」

スティーウ、ン「まずは武器を手に入れないと。でなければ、武器を持っている者と行動するとか」

フラン「州兵の基地は？」

スティーウ、ンは呆れたように彼女を見た。

「君は何も聞いていないんだな。基地は今、暴徒のやつらと戦闘中だ。近付けないし、ここからだと遠い。やはり武器が必要だ」

「じゃあ、調べてみる」

フランは倉庫を調べ始めた。何か、役に立つモノを探して。

武器はなかった。ラジオはある。だが壊れてるらしい。スティーウ、ンは修理し始めた。

「ねえ、スティーウ、ン」

「なんだい、フラン？」彼は汗を拭いながら言った。

「キスして」

これはスティーウ、ンにとって、予想もしない言葉だった。「お願い。恐いのよ。死んでしまいうような気がして。だから・・・して欲しいの」彼は戸惑った。しかし、彼も同じような気分だった。

彼は彼女を抱いて寄せた。そして、キスした。

何も考えられない。

音も聞こえなくなった。

自分が解き放たれるような。

彼は、フランの上に乗った。彼女は何も言わない。手が勝手に服を

脱ぐ。裸になった。彼は彼女に触れ合った。肌と肌を。秋で寒いのに、気にならない。今は暖かい。いい感触が襲ってきて・・・。

第四章 テレビ局（後書き）

長らく更新せず、すいません。早く完結させるようにします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9944f/>

ゾンビ 現代版

2010年10月11日23時02分発行